# ぼ喜多の小説（仮題）

百合を継ぐもの

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ぼ喜多の百合小説です。

遅筆です。少しだけ嫉妬するような描写はありますが、たぶんみんななかよしです。

ネタバレになるので具体的には書きませんが、別ＣＰ要素あります。

# 目　次

序：後藤ひとりは喜多郁代に恋をした　1
第一話・後藤ひとり：孤独は嫌だ　7
第二話：後藤ひとり・文化祭１　―　13
第三話：後藤ひとり・文化祭２　―　20
第四話：喜多郁代・幼い恋心　――　25

# 序：後藤ひとりは喜多郁代に恋をした

きっかけはいっぱいあるけれど、どれが最初だったかはわからない。

指先の努力に気が付いた時。名前を呼んでこちらに笑いかけてきた時。放課後誰もいない、誰も来ない暗い教室で並んでギターを弾いた時。ライブの時の力強い歌声を聞いた時。

その時々で未知の感情が積もり山となり、あるいは器に注がれて溢れ出したと表現した方が近いのかもしれない。

あ、好きだ。と思った。

後藤ひとりは、喜多郁代に恋をした。

☆

放課後のいつもの練習の時に、何か違和感のようなものを感じた。漠然とした楽しいという感情の中に、その柔らかくも暖かい感情の中に埋もれていた何か。鋭く差すよう

に激しくて、触れることのできないほど熱いもの。本当はこの時には既に気が付いていたのかもしれないし、本当に気が付いていなかったのかもしれない。

ライブハウスでのいつもの練習の時に、強い知らない感情を覚えた。確かに感じる楽しさの中に、それでも強く叫び声をあげる醜い感情。彼女のかき鳴らすギターの和音と声の調和。その心地良さに酔いしれていた時にふと、彼女が山田リョウに対して向ける表情を思い出した時に感じたもの。

楽しい楽しい楽しい恋しい、愛おしい。

楽しい楽しい楽しい苦しい、羨ましい。

ライブ活動の楽しさに埋もれて、あるいは埋めて。

ひとりはまだ大丈夫だった。

ある日の放課後。

向かい合ってギターを鳴らしていた時に。

真剣な表情をする喜多を見ていた時に。

整った鼻梁を視線でなぞって、大きくて輝かしい瞳を見て、ストロークの度に揺れる毛先の繊細さに触れてみたいと思い、小さく色づいた唇に目を奪われた。そしてふと、それまで気づけなかったのが嘘みたいに。もしくは、いよいよ無意識に隠していたものを隠せなくなったのか。

どちらにせよ何かが剥がれ落ちるように、ひとりはある日突然、自分の感情に気が付いたのだ。
気が付いてしまったのなら、もう駄目だった。

「ぼっちちゃん？　今日、どうかした？」
「あっ何でもないです！　あっごめんなさい今日は……ミスが多くて……」
伊地知虹夏に声をかけられて、ひとりは慌てて首を振った。
上の空になってしまっていた。今は練習中だというのに、別の事ばかり考えてしまっていて、少しも集中できていない。
そんな風に考えてから、そもそも何かほかのことを考えてすらいなかったことに気が付く。喜多の事で思い悩んでいるのかと思えばそうではない。思い悩むことが怖くて、別のことを考えてしまっていても喜多の事に行きついて、だからそもそも何も考えないようにしていた。
少しでも頭を働かせてしまえば、喜多の笑顔と日ごろの可愛らしい声と、力強い歌声とが脳を満たす。それはすぐに炎をより猛々しくする薪となる。
「いったん休憩にする？」

「す、すみません……」

虹夏はひとりが何に悩んでいるのかなんて、当然知らないだろう。それでもこうして気を使ってくれて、申し訳なかった。本当にいい人だと思う。とても優しい人だ。

だからこそ、こんな醜い感情を気づかれたくない。見られたくない。

そして。

「……？　ぼっち？」

「あっなんでもないです」

ついリョウをじっと見つめていた。可愛らしく小首をかしげる様は女の子らしいけれど、そのあと目を細めてペットボトルの水を煽るその横顔は凛々しく、いつだか喜多の語っていたユニセックスな見た目という言葉を思い出す。

訂正するべきだと思う。

両方持っていてずるいのだ。中間にいるのではなく。

ひとりは、気づかれないように喜多を見た。喜多はひとりの方を見てはいなかった。ギターの弦を指で押さえたり、リズムを取って練習をしているふりをしながら、リョウを見ていた。

☆

結局その日はまともに練習にならなかった。誰もが気にするなとは言ってくれたけれど、この問題がすぐに解決するものでないとひとりは分かっている。

誰かをここまで強く想ったことは初めての経験で、そのこと自体に混乱を感じている。

その相手にはすでに想い人がいて、その想い人は同じバンドメンバー。漫画でありそうな話で、自分のことなのに現実味がない。

炎が収まらない。心を無にして、焼き尽くされて灰になるのに任せても、バンド活動を続けるだけで燃える何かが足されていく。そもそも、灰になってもこの炎はなくならないと確信していた。

恋慕の炎と恪気の炎。お互いを燃料にして、より強くなり続ける。

それでも永久で無いのは知れていた。

どれだけ嫉妬しても、ひとりはリョウには勝てない。リョウを恨むことも嫌いになることもできない。とっても大切な仲間なのだ。

どれだけ恋焦がれても、ひとりは喜多の心は手に入らない。だからといって簡単に諦めることもできない。こればかりは理屈じゃないのだから。

それでも永久じゃない。嫉妬するのが馬鹿らしくなるほどに二人の関係が深まるだとか、嫉妬する気力も失せるだとか。より喜多の事を愛するようになって、純粋に彼女の幸せだけを願い始めるだとか。

いつだか、二人の幸せを心から願う日が来るのかもしれない。今はまだそのことを考えると泣きそうになるけれど、その日は遠くないはずだ。

ひとりは鏡で自らの顔を見た。普段そんな習慣はないけれど、ふと、今の自分の表情を確認したくなった。

おそらくは、普段とそれほど変わらない。顔色はよくないけれど、いつもの事だ。

「喜多さん……」

気持ちを込めて名前を呼ぶ。

どんな感情を込めたのか、ひとりにもわからなかった。

# 第一話・後藤ひとり：孤独は嫌だ

ひとりは昼食の弁当を、階段横にある誰も来ないスペースで食べる。積み上げられた机と、教室から出たであろうゴミ袋が放置されている暗い場所。隅の方は目で見えるほどに埃が溜まっていた。

「……」

先ほど、喜多に弁当を一緒に食べないかと誘われた。魅力的な提案だと考えるべきだ。好きな人の方から何かに誘われるというのは、普通はみんなそう考えるはずだから。しかも、ひとりに配慮してくれたのか、他の友人との交流を断ってまで、二人きりで食べようと思ってくれていた。

それでもひとりが断ったのは、喜多の顔を見たくなかったからだ。

練習の時は仕方ないとして、それ以外では喜多と二人きりになりたくない。

これ以上喜多に想いを募らせたくない。ただでさえ取り返しがつかないと感じているのに、今よりさらに好きになってしまったらどうしたらいいのかわからない。

「後藤さん！」

「きっ!?　き、喜多さん……？」

唐突に声をかけられて、ひとりは転がるようにして仰け反る。すでに弁当は平らげてしまっていたから、少しの食べかすが散らばっただけで済んだ。それでも、ああ、喜多に汚いところを見られてしまった。

慌ててポケットからティッシュを取り出して拾う。

「あっごめんね後藤さん。突然叫んで」

ひとりが米粒をティッシュで拾うのを、近づいて手伝ってくれようとした喜多だったが、本当に少ししか散らばっていない。ひとりの側に来るまでの僅かな時間でひとりは全てを拾い終えていた。

喜多の方を見ると、喜多もひとりの顔を覗き込んでいたために目が合う。慌てて目を逸らした。

逸らした先の、壁の汚れを眺める。そうして喜多の方から何か話し始めるのを待っていた。しばらくの沈黙。

ようやく普段の喜多と少し様子が違うことに気づいた。改めてひとりは、喜多を見る。相変わらずかわいらしい顔。本当に可愛い。ひとりがどれだけ頑張っても手が届かない程に。

しかし、普段ひとりに向けられる表情と違って、僅かな憂いが見えた。喜多は憂わし

げな表情をしていても綺麗だった。
「き、喜多さん？　あっえっとどうしたんですか？」
「後藤さん……最近、何かあったの？」
「えっ？　な、なにもないです」
咄嗟に否定したが、喜多はそれでもひとりをじっと見つめ続けている。ここで目を逸らしたら何かあると思われるだろう。気を張って喜多の目を見つめる。
徐々に顔が熱くなって、結局すぐに逸らした。
「その、もし何かあったら……」
喜多はそんなひとりにそう言いかけて口を噤み、少し考えてから。
「お弁当まだ食べれてないから、ここで食べて良い？」

☆

ひとりは最初こそ曖昧な反応をして逃れようとしたが、結局断ることは出来なかった。
「それでねー――」
弁当を食べつつ、時折喜多はひとりに話しかけてくれる。

もう弁当を食べ終わっていたひとりは喜多の横にしゃがんで、時折つまらない返事をするだけなのに。

こちらも何か話をしなければと思い、けれど、何も考えずに喜多の話し声に意識を溶かしたいとも思った。

ひとりの勝手な妄想ではあるのだけれども、喜多もそれを望んでいるように思えてしまう。喜多の話をしっかりと聞き取るのではなく、その声色に自分を溶け込ませるように埋没させて、それが快感だった。快感というと強い言葉になってしまう。より優しい表現を目指すならば、安心したのだ。これ以上なく、そもそも比較の対象もないくらいに。

「喜多さん……」

「？　なぁに後藤さん？」

思わず名前を口にした時に、喜多はひとりの顔を覗き込みながら、優しく微笑んで見せた。それがひとりにはどうしようもないほどに毒だった。

可愛いかどうかなんて、ひとりが喜多を好きになった理由にはそれほど関係ないのだけれども、それでも好きな相手が可愛らしい表情で、至近距離で、こちらを見ていたら耐え難いと思うのは自然だろう。

「あ〝！　す、すみません……！　何でもないです！」

慌てて顔を逸らして言うひとりだが、それに対して喜多はあまり納得のいっていない様子だった。近頃のひとり自身、自らの変化を悟らせずにいられた自信はない。初めて本気で好きになった相手に、相手次第によっては気持ち悪いとすら思われてしまうかもしれないこの感情に、どう向き合えばいいのか教えてくれるモノはこの世に存在しえなかった。

☆

放課後、今日は自主練の日であったために、それにアルバイトもないので、ひとりは自室にこもってギターを弾いていた。

流行のバンドの曲はもちろん弾けるが、近頃は結束バンドのオリジナル曲を重点的に弾いていた。練習中に、ふと喜多のことを考えてしまって弾けなくなる。それを少しでも減らすために、途中で何か考え事をしてしまっても、手だけは勝手に動き続けるようになるまでずっと練習をした。だというのに、いつもなら無意識にでも動き続けているはずの手が止まる。

「……嫌だ……」

楽になりたい。これ以上苦しみたくない。この感情をどう処理したらいいのかわか

らない。

狭い押し入れの中で、手元すら見えない薄暗い押し入れの中で、ひとりは自らの感情すらも見失いかけている。暗く湿ったこの感情は、たとえどのような感情を持っても変わらないその在り方は、どうあれ喜多に相応しくないと思えてならない。

壁は多い。同性である事、自分は明るく活発的な人間でない事。

前者は、とても辛い事だけれど、喜多がリョウを見ている表情からして大きなものではない。後者も、必ずしもリョウが活発な人間でないことから、障害とは言えないことは分かる。なるほど、そう考えればひとりにも勝機がありそうにも感じられてしまう。

ただ、その判断基準にもなっている、山田リョウこそが問題なのだ。ひとりには絶対に勝てない相手。

「もう、嫌だよ……」

孤独は嫌だ。

たとえ友がいたとしても分かち合えないであろうこの苦しみを知った時に、その恐ろしさと切なさを、初めて理解したような気がした。

# 第二話：後藤ひとり・文化祭1

慣れと言うものは恐ろしい。

高鳴る鼓動にも、脳が頭を飛び出して浮き上がってしまったかのように感じる恐怖心にも、ひとりは慣れてしまった。

今でも喜多と顔を合わせると、頬が熱を帯び、全身を巡る血液の流れがわかるような気がして、溶けるような高揚を感じる。

今でも喜多がリョウの言動に惚れこむ様を見せられるたびに、全身が冷えて、訳の分からない恐怖が直接脳を握りつぶす。

それでも、ひとりはそれを隠すのが上手くなって、いつしか自分すらも騙せるようになって。

「……」

そもそも、生きているうえで悩みは尽きない。

バイトの接客はいまだに不慣れだし、喜多の手伝いもあって赤点は回避したけれど成

績は良くない。バンド活動に集中して頑張らなければ、いつか想像した暗い未来が現実味を帯びてくる。

喜多に対する恋心に変化はなくとも、そのことについて思い煩うことは格段に減った。それこそ、今は文化祭ライブのことを考えなければならない。

「……私は、大丈夫」

☆

文化祭の一日目が終わった。メイド喫茶なんて、絶対に無理だと思っていたけれども、終わってしまえば悪くなかったとも思う。

ひとり以外の結束バンドメンバーがメイド喫茶で手伝い始めてから、戦力外通告をもらったのは、明日のライブの光景がすでに想像できてしまって不安になったが。

メイド服のみんなは可愛かった。虹夏は可愛くて、リョウは綺麗な感じ。同性でもドキッとする、なんて表現はたまに見かけるけれど、二人を見た時はそれを思い出した。二人を見てそう感じたからこそ、喜多に対して特別な想いを持っているという事実を、久しぶりに強く叩きつけられた。喜多のメイド服姿を見た時の、胸が満たされるような喜びと、胸が空っぽになってしまうような淋しさ。矛盾するような感情が同時にやって

きて、ああこれが恋なのだと再認識して、やっぱり最後には怖くなった。

文化祭ライブの前の最後のリハーサルは集中できていたはずだ。以前みたいに何も考えないのではなく、その瞬間の演奏にだけ集中するのが上手くなった。ギターヒーローとしての実力には程遠くとも、何とか人様に聞かせられるくらいには出来ているはず。

リハーサルが終わり、ひとりは思わず喜多を見つめていた。見惚れていたのもあるし、ギター演奏の技術向上にも感心して。そんな視線に気づいたのか、

「なぁに？　後藤さん」

「あっいやなんでも！」

声をかけられて慌てて否定する。

もしかしたら見惚れてしまっていたことに気づかれたのかもしれないし、そのことを知られてはよくない未来が見える。誤魔化すためにも明日の話をすることにした。

「ラッ、ライブ少しでも盛り上がるといいですね」

「絶対楽しんでくれるわよ。皆後藤さんにびっくりしちゃうかもね！」

「えっいやそれは……」

咄嗟に否定してしまったけれど、喜多にそう言ってもらえるのは嬉しい。こうして会

話しているだけでもどこか多幸感に包まれているというのに。

「絶対するわよ。だって、後藤さんは凄く……誰よりも……」

言いかけて、なぜだか暫く口を噤んだ喜多に、ひとりは何かを言おうとして。けれどそれよりも先に。

「ううん！　なんでもない！　がんばろーね！」

「えっあっはい！」

にこりとした微笑みに見惚れそうになったのを必死に抑え込んで、慌てて返事をしたひとり。なぜだか喜多の頬が赤くなっていることに気が付いてはいたが、気にしないことにした。

今日は、明日は――少なくともライブのある時は、喜多への恋心すら忘れ去ってしまおう。最高のライブにすることだけを考えなければ、自分の所為でライブが台無しになってしまうようなことがあってはならないのだから。

そもそも、それを言うのならば、本来ひとりが喜多に恋心を寄せている事すら許されない事なのだ。トラブルになり得るし、気持ち悪がって喜多が結束バンドから出て行ってしまうかもしれない。自分の身勝手な感情のために、結束バンドが無くなってしまってはいけない。

「……絶対に、頑張ります」

小さく、含むようにして、ひとりは決意を口にした。

「ぼっちちゃーん。みんなで晩ご飯食べてかえろーよ！」

「あっはい！」

急に声をかけられて、慌ててひとりは返事をした。

☆

皆で晩ご飯を食べて、解散してから、空を眺めた。都会の地上の光に溢れた夜空を見ても、点々と星が見えるだけだけれど、強く輝く星はどこからでも見れるのだと実感した。

今のこの気持ちで、手の届かない星を見上げる何て一層悲しくなりそうな気もしたけれど、実際は逆だ。この世の誰もが手の届かない星を見て、不思議と安心した。すでに秋の気候になっている。時折急に暑くてたまらなくなるような春と違って、秋は意外と安定しているような気がする。外を歩いていると時折吹く強い風が涼しくて。

「ぼっちちゃん!!」
「ひぅっ!?」

背後からの叫び声に思わず悲鳴を上げて振り返ると、申し訳なさそうな表情をした虹夏が立っていた。先ほど解散したのだけれど、どうやらひとりを追いかけてきたらしい。
「あ、ご、ごめんね」
悲鳴を上げたひとりに謝った虹夏は、普段と違ってどこか緊張したような、不安そうな表情でもじもじと、言葉を探っている様子だった。
「あの、さ。ぼっちちゃん。最近何か、悩みでもある……？」
「え？　あ、いえ。な、何もないですけどっ……」
「本当に？」
「あっほん、本当に……なんでもないです……」
普段よりもずっと鋭く、だからといって睨むのではなく大切な何かを見るような目で穿つ虹夏の視線に、正面から受け止められなくなって目を逸らしながらひとりは答えた。

「……あたしに、言えな――――」

虹夏は、何かを言いかけてやめて。

「もしね、相談したいことがあったら何でも言って欲しいな。力になれるかもしれないし！」

「あっはい。な、何かあったら……言います」

そう答えながらも、やはり、ひとりはこの一方的な愛情を絶対に誰にも気づかれないようにしようと、強く決心した。

# 第三話：後藤ひとり・文化祭２

文化祭ライブの真っただ中。先ほどから違和感を感じていたけれど、突然だった。
一弦が切れた。二弦のペグが壊れている。音を合わせられないし、そもそも一弦が切れた状態でギターソロなんて出来るない。
ソロの高音が弾けない。ある程度まで二弦でカバーできても限度があるし、その二弦の音もあっていないのだから全く弾けない状態だ。
どうしようどうしようと何度も心の中で呟きながらも、けれど何も考える事が出来ていない。パニックに陥った脳は活動を停止した。

自分の所為でこのライブが台無しになってしまう。
誰か助けてと心の中で誰かへ救いを求めた時に、
「あ……」

喜多の奏でる音が耳を貫いた。リードギターとは違って格好いいメロディがあるわけでも、素晴らしい演奏技術が駆使されているわけでもないただの和音が、けれど曲を

支える大切なバッキングギターが、確かにひとりを支えた。
笑みを見せた喜多に、混乱に支配されていた思考が一瞬で正常になる。足元に転がっていたカップ酒に気が付いて拾い上げる。音を確認し、耳を頼りに弾く。リョウも虹夏もひとりを信じてくれたらしく、八小節を再度繰り返してくれている。

最後まで演奏し終えて、心地の良い喪失感を感じながらも、歓声が耳に入ってくる。興奮して、激しくなった心臓の音に合わせて鼓膜すらも鼓動しているように感じた。

☆

「ひとりちゃん」
文化祭ライブ。
その終了後に客席にダイブしたひとりは、客に避けられて床に激突し気絶して、保健室へと運ばれていた。そこでひとりが目を覚ますのを待ってくれていたらしい喜多は、なぜかこれまでの「後藤さん」という呼び方から、名前呼びへと変わっていた。
これは距離が縮まったということなのだろうか。そうだとしたら嬉しいと思う。嬉

しいと思うのだけれど、何度もこの気持ちに蓋をしようとして、もういっそのこと恋愛感情すら忘れてしまおうとすら決心して、それなのに喜んでしまっている自己を嫌悪した。

「私が、ひとりちゃんを支えられるようになるから」

ひとりの手を力強く握って喜多は言う。左手の先が硬くて、いっぱい練習したんだろうなと考えて、先ほどのライブの光景が勝手に浮かんできた。

一弦と二弦が駄目になって、本当にどうしようもない状況だと思っていたけれど、カップ酒のお陰で乗り切れた。観客は「弦が切れたのに頑張った」と褒めてくれたけれど、それは違う。あの時ひとりが演奏をあきらめなかったのは、喜多がいてくれたからだ。

あの時支えてくれたからだ。

このあとひとりはどう行動すればいいのだろうか。

喜多の手を握り返して、すでに十分支えられていることを伝えて、そのままこの秘めた思いをさらけ出してしまおうかとすら思った。

もう本当に駄目だ。先ほどのライブで見せられたかっこいい演奏も、普段のかわいらしい表情にも、凛々しい歌声にも、今の蕩けてしまいそうな甘い言葉にも。ひとりはも

うどうしようもできないくらいに惚れこんでしまっている。
後先考えずに行動しようとさえ思った。このまま告白して、振られても、それはとても悲しい事だけれども、けれど間違いなく今よりは楽になれる。
それで、もしかしたら喜多が結束バンドを辞めてしまうかもしれない。辞めなくとも関係がぎくしゃくして、結束バンドの活動に影響が出るかもしれない。いよいよどうしようもなくなって、結束バンドを辞めることになるかもしれない。それでも今は楽になれるのだからいいじゃないかとすら考えてしまった。

「喜多さん、ありがとうございます。でも、私は大丈夫です」
ひとりの精いっぱいの拒絶の声は、不思議と淀みなく。
「え？」
何かが抜け落ちたような、色彩にかけた感情の見えない声に、ひとりは喜多の顔を見た。すぐに後悔した。
視線を逸らして、全身に重くのしかかる沈黙に耐える。
「あっ、えっと……急にごめんなさいっ！　あっ、おだいじにっ！」

保健室から走り去る喜多に、反射的に伸ばしそうになった手を抑えて。

秋はそこまで冷えない。ひとりの手も冷えていない。喜多の手の温もりは残っていなかった。

# 第四話：喜多郁代・幼い恋心

憧れと恋心が別のものだということに気が付いたのは、それでも比較的早い時期だったと思う。恋愛経験がない喜多郁代には、当初はその二つの区別というものはあっていないようなものだった。路上ライブでベースを弾く彼女を見た時に感じた強烈な何か。それは脳を焼く恋のようだった。事実として、彼女――山田リョウの友人になりたいのではなく特別な存在になりたいと感じていた。友人よりも密に、深く。

相手に尽くしたいと思うこの感情はきっと恋だろうと確信していた。確信していたというと、一度考えて判断したみたいになってしまうけれど、考えてすらいなかった。

それを考えさせられたのは、もう一度焼かれた時だ。

網膜から光としてやって来た強烈なもの。耳朶を叩き脳に染み込んできたような、そのまま脳の皺に絡まるようにして離れなくなったもの。

そういった五感すら超越して、直接胸の奥を内側から支配されてしまったその瞬間。

結束バンドの初ライブの時、もう駄目だと思った。辛くて怖くて、寒かった。

だからこそより強く焼かれたのだ。
網膜に焼き付けられた。鼓膜があなたの音に一度震わされた。恋を知ってしまった。
山田リョウへの恋心だと思っていたものを憧れだと知って。
新たに感じたこの感情こそが恋なのだと知って。
喜多郁代は後藤ひとりに恋をした。

☆

練習中に、ふと視線を横へ向ける。ベースで練習していた頃に比べれば当たり前なのだけれど、ギターというものは思った以上に早く弾けるようになるものだ。
身体が覚えている通りに勝手にギターを鳴らすのに任せた。
ひとりは常に俯いてギターを弾いている。下を向いているから、二重顎気味になってしまっているけれど、それはそれで可愛らしいと思った。

後藤ひとりの魅力を上げろと言われたならば、喜多はそこそこ答えられると思う。見た目が可愛いと言うのはもちろんあるし、ギターが上手いところも必ず挙げたい。いざという時に頼りになるし、それ以外でも、変わったところはあるけれど、基本的に優しくていい子だ。

今は、ひとりの顎が気になって仕方がない。二重顎といえばそれはあまり可愛らしい印象を感じないかもしれないけれど、あの顎が柔らかそうなところを想像してみれば、急に愛おしく思う。あの顎に触れてみたい。顔を上げた時は、輪郭を太ましいと思わないし、ただ単に肌が柔らかいのだと思うから。

さりげなく腕なんかに触れた時はサラサラとして綺麗だったから、今度は顔に触れてみたい。これから寒くなり始めるから、露出は減るし、自然に触れる機会は減っていく。

そう言えば、以前リョウがひとりを撫でていた。まるで猫にするように、顎から首にかけてのところをなでなでと。あの時のひとりは可愛かったなと考えてしまえば、その時はリョウにそうしてもらえているひとりに嫉妬していたことを思い出して、複雑な気分になる。

今、もし目の前であの時と同じ光景を見せられた時に、自分は一体どちらに嫉妬するのだろう。

自分が好きなのはひとりであるのだから、リョウに対して嫉妬するべきなのが確かだろうに、想像上ではどちらに対しても嫉妬してしまっている気がする。まるで両方に気があるみたいで、自分に軽蔑した。

☆

練習が終わって、喜多はすぐにひとりから視線を向けられていることに気が付いた。ふとした時に常にひとりの方へ注意を向けているから、気が付くのは当たり前だ。

話せる機会が少しでもあるというのは嬉しい事だけれど、なるべく何でも無さそうに声をかけることを意識する。

「なぁに？　後藤さん」

「あっいやなんでも！」

普段の友達とする会話と比べてしまえば、こんなものは何も話していないのと変わらない。けれど、それでも楽しいと思えた。たったこれだけで。

「ラッ、ライブ少しでも盛り上がるといいですね」

このまま会話が続くことはないかと思っていたけれど、ひとりの方から続けてくれた。

「絶対楽しんでくれるわよ。皆後藤さんにびっくりしちゃうかもね！」
「えっいやそれは……」
ひとりの格好いいところは喜多が一番知っているつもりだ。すぐ真横という特等席で、直接その身を焼かれたのだから。
「絶対するわよ。だって、後藤さんは凄く……誰よりも……」
そこまで言いかけて慌てて口を噤んだ。それから葛藤する。
「……」
ほとんど無意識に言いかけていた言葉を止めたから、最早喜多本人にもこの後に続くべき言葉が何だったのかわからない。けれど、改めて考えて言うことは出来る。
格好いい、とても頼りになる、可愛い、ギターが上手い、特別な輝きを持っている。そんな風に魅力を語ることは出来たけれど、そんな風に魅力を頭の中で列挙していると、好きという気持ちが溢れてしまいそうになって。
「ううん！　なんでもない！　がんばろーね！」
喜多はそう言いつつ、誤魔化すように微笑んだ。

まだ、決意は固まっていない。山田リョウという一度好きだと思っていた相手。その感情が違っていたと知った時の恐怖の方が勝っている。

だから先程のように不誠実極まりない考えをしてしまうのだ。
リョウのことが好きだと思っていた時のように、もしもひとりの事が好きだと思うこの気持ちすらも間違いだったら。なんだか綺麗なアクセサリが砕け散ってしまうみたいな気がして、怖くてたまらない。
喜多は絶対に誰にも聞こえないような小声で。
「すぐにわかるはず」
波立つ心に、希望を語って静寂を。

☆

観客に向かってダイブした結果気絶してしまったひとりを見下ろしながら、喜多は今度こそある確信を得ていた。初めてのライブの時からずっと考え続けて、ようやく得た答え。
喜多はどうしようもないくらいにひとりの事が好きなのだ。

「私が、ひとりちゃんを支えられるようになるから」

目を覚ましたひとりの手を握り締めて言う。

とめどなく溢れる思いを抑えることなんてできない。なるべくそれが恋慕から来た言葉だと知られないように、想いを伝える。この言葉だけならば、特別な意味合いは含まれていないはずだ。

いつか、ひとりの横に並び立てた時に、気持ちをそのまま伝えたい。それまでは、ひっそりと想うだけにしておこう。

でも、こうやって少しだけ、溢れた分を言葉に変えて伝えてしまっても許されるはず――――――だなんて言う油断が良くなかった。

「喜多さん、ありがとうございます。でも、私は大丈夫です」

この言葉を拒絶ととらえるのはひねくれていると思われるかもしれない。遠回しな拒絶だと捉えることは出来ても、きっぱりとしたものではないはずだ。

それを言ったのがひとりでなければ。

消極的な彼女にしては、充分に強いその言葉が、喜多とひとりとの心の距離を明白にした。

踏み込むことを許さないというその強い意志は、ようやく確信をもって火をともした

ばかりの幼い恋心には、あまりにも冷たい。

「あ、あれ？　喜多ちゃん？」

気が付けば、外で待っていた皆の前を通り過ぎようとしているところだった。ここまでどうやって歩いてきたかすらもあやふやだったけれど、大切な結束バンドの人たちの顔を見れば、いくらかものを考えられるようになってくる。

「伊地知先輩……」

喜多の様子がおかしい事には全員気が付いているのか、不思議そうなそれでいて心配そうな顔をして。

「郁代？　何かあったの……」

普段そんな風に表情をゆがめることの稀なリョウが、強く心配した様子でそう聞いてくるのだから、喜多はよほどひどい顔色をしているらしい。

「だ、だいじょうぶです……！　あっ、きょ、今日は約束があるので!!」

リョウからそんな風に心配された事への僅かな喜びが、傷んだ心にさらに追い打ちをかけた気がする。ああ、こんな風にならなければ。最初からひとりの事だけを見ること

が出来ていたのならば、何かが違っていたのではないかと。